

昭和の禪海和尚

(道路愛護)

Y
N
生

傳へ聞く天下の名勝耶馬溪青の洞門は、享保九年秋の初めより延享三年の冬に至る二十一年間、不退轉の歲月を積み小説「恩讐の彼方へ」の主人公なる禪海和尚が諸人救済の大誓願の下に肉を剥ぎ骨を削り啞るゝとも鑿堀の鑿を放たぢと槌を揮ふた勇猛精進の賜で隧道開鑿の大業を成就した。

土木事業の大恩人なる禪海和尚の鑿堀せる青洞門より程遠からぬ福岡縣と大分縣を堺せる山國川の清流に架せられて兩縣を繋ぐ太平橋なる土橋があつた。太平橋は奇勝耶馬溪の入口に架せられてあるから洞門停車場宇島港線と呼ぶ重要府縣道である。昭和三年此の地方に近年稀なる大水害があつて、狂奔する山國川の怒濤に太平橋も橋脚三柱を押

流され残部も燃を生じたので國庫補助を仰ぎ復舊の計畫がたてられ三浦内務技師を主班とする検査官數名が本縣に出張せられ現地實査の結果土橋として復舊を認められた。

翌年八月坂本土木部長の英斷により鐵筋混凝土に設計變更せられ直ちに工事に着手し翌年四月蜿々浮城の如き鐵筋橋は美事に竣功せられた。由來山國川には鐵筋混凝土橋は一橋もなかつたのでこの現代的な混凝土橋に對する地方民の歡喜と誇りは非常なものであつた。そして七月中旬福岡大分兩縣官民合同で盛大なる竣功式が舉行せられた。

それから五ヶ年の歲月は流れた。此の間私は、此の地方の管區長を拜命したので太平橋にも再三出張の機會があつた、出張の都度何時も奇異の感にうたれた事は、この太平

橋の橋面やその前後の道路約三百米が何時も綺麗に掃除せられ、雜草一莖だに見當らぬうへに塵埃木の葉さへも掃かれて、清々しい箒目の痕さへあるのに誰が一體こんなに清潔に掃除をやつて呉れるのだらうと或る日出張の折村人に尋ねた。

村人はこの掃除は中園久治といふ八十一歳の老翁が寒風膚を劈く冬の晨も暑熱砂を溶かす夏の中天にも毎日二回は塵取を提げ箒をとつて掃除をしてゐるからと聞された。そこで唐原村長に右の話を訊せば村長は、中園翁があの老齡であの橋が出来てから今日まで毎日世間の噂さに耳をかさず黙々と掃除を續けてゐる不撓不屈の精神と努力はあの洞門鑿堀の恩人禪海和尚につぐものではあるまいか、そして翁がこの社會奉仕の觀念は何時か村の青年男女に強き感激をあたへ、一年一度の道路愛護作業の如きも年々向上して居る、實に翁は昭和の禪海和尚です……と村長は感激に満ちて話された。

されば昭和十一年四月二十四日滿六ヶ年目に福岡縣土木

部長、大分縣土木課長並に道路改良會支部長の名を以て、

翁が朝夕掃く太平橋々上に於て盛大な表彰式が舉行せられ置時計一ヶを贈呈された。式後翁は六ヶ年の喜びを、その温顔にたゞへながら、お上が澤山のお金をかけてこんな立派な橋を架けて下さつたお蔭でどんなに大水が出てもなんの心配もなく過されるのです。あの七年前の土橋があの大水で流されたときお互ひはどんなに不便であつた事か？併しこの橋が出来てからそんな心配もなく濟んでゐる。そのお禮心に毎日掃かせて貰つてゐるのに表彰して下さるなんて……

と語つてゐた。噫翁がこの述懐を村人はなんと聞いたであらう！夕陽西山に沈む耶馬千溪のほとり橋上に箒執りて立ち、入合の鐘に合掌してゐる翁の姿を村人はなんと見るであらう！噫々昭和の禪海と感謝してゐるのではあるまいか？！